正しく表示されない場合は、ブラウザで表示させてください。

ICRC

赤十字国際委員会 ニュースレター

特集号



6月11日公開！「戦争と生きる力 プログラム」

米国アカデミー賞が公認する国際短編映画祭「ショートショート フィルムフェスティバル & アジア」（SSFF&ASIA）における「戦争と生きる力 プログラム supported by 赤十字」を６月11日(金)～30日(水)までオンライン上映しています。今年のラインナップは、実話ベースのドラマやドキュメンタリーに加えて、アニメーションやコメディータッチの作品など、世界各地から届いた選りすぐりの短編映画10作品と、ICRCが制作し国際的な賞を受賞した２作品の計12作品となっています。

視聴は無料です。このプログラムとの出会いをきっかけに、日本発の「思いやり・平和」の気持ちを、世界のみんなの「生きる力」を支える原動力に変えてみませんか？

視聴はこちら

2021 ラインナップ

戦争と生きる力 プログラム



奪われる魂

◇ ストーリー ◇

2013年、ミャンマー。脱走しようとして失敗した子ども兵士の兄妹が主人公で、実話に基づいている。12歳の妹は、一緒に逃亡を図った兄を自らの手で殺すか、共に死を待つか、究極の選択を迫られる。

◆ ICRCスタッフによるレビュー ◆

子どもたちは最も傷つきやすい存在。周囲の大人はそのことを認識して接する必要があります。子どもたちの切実な願いは、学校に行き、友達と遊び、未来を手にし、何も恐れることなく生きること。それを大人たちがきちんと守ってやり、世間の関心を子どもたちに向けさせなければなりません。しかし残念なことに、現実はこのショートフィルムにあるように世界中の多くの子どもたちが厳しい状況のなかで生活しています。だからこそ、私たちは変化をもたらすために立ち上がる必要があるのではないでしょうか。



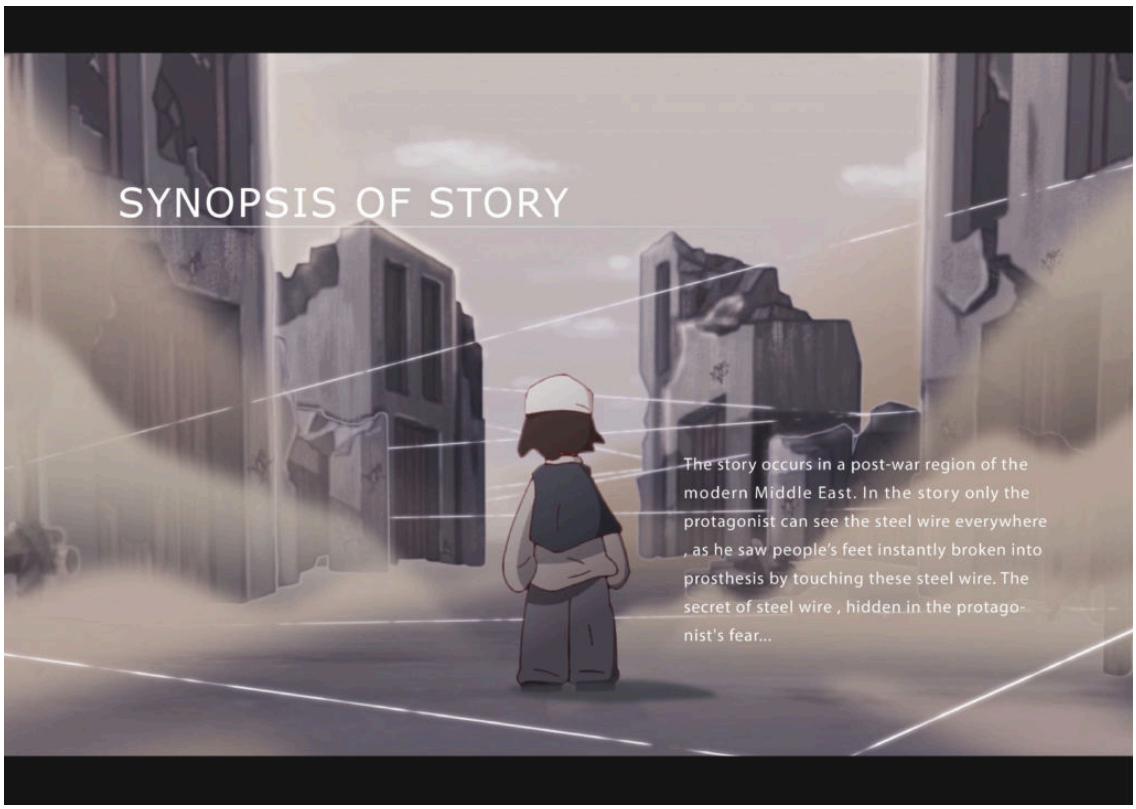
老いたネズミ

◇ ストーリー ◇

かつて戦場カメラマンだった男性は、予期せぬ来客を迎えたことで、過去の自身の作品の”正義”を問う。

◆ ICRCスタッフによるレビュー ◆

本作品は約６分という短さに関わらず、私たちに「正義」とは何か考えさせる作品です。かつて戦場カメラマンだった主人公の男性が葛藤する「正義」は戦場で活動するカメラマンや報道関係者のみならず、私たち人道支援に従事するスタッフも一度は通る「悔しさ」に通ずるものがあると思いました。 私は初めて人道支援の現場に行ったとき、「自分の無力さ」と「焦り」から、胸が締め付けられ眠れない日々を過ごしました。当たり前ですが、戦場カメラマンにしろ、エイドワーカーにしろ、一人の人間にできることは限られています。だからこそ、現場にいる自分は何をすべきなのか、被害にあった人々とどう接するべきなのか、自分自身に問いかけ、日夜苦悶します。本作品は、答えのない「正義」について改めて考えさせられる作品です。



◇ ストーリー ◇

戦争で壊滅した町に暮らす少年。彼にだけ見える銅線は、街中に張り巡らされ、触れるだけでさまざまなものを奪っていく。少年はその銅線がもたらす悲劇を目の当たりにして、戦争が落とした暗い影とフラッシュバックに怯え、おののく。

◆ ICRCスタッフによるレビュー ◆

「戦争と生きる力」のラインナップ選考を担当しているのですが、この作品を視聴し終わった瞬間、是非入れたい！と思いました。 音楽も含め、映画の雰囲気から「鬼滅の刃」を連想させ、作品の中に出てくる”糸”も、那田蜘蛛山を思わせるような、、、（もちろん画質やタッチは全く異なりますが）。 いつの時代であれ、現実／空想の出来事であれ、少年・少女が闘い、罪のない人たちが犠牲になることは本当に虚しく、あってはならないことだな、とつくづく感じます。 短編映画の場合、作品の中ですべてが語られないことが多いので、見終わってから「これ、どういうこと？」「何を伝えたかったんだろう？」というものも少なからずあります。見ている人の想像力や感受性、事前知識によって、結末や作品に託されたメッセージの捉え方は人それぞれです。この作品は、アニメということもあり、戦争の悲惨さを身をもって知らない私でもその世界に入り込め、メッセージを感じ取ることができました。



HOPE（希望～彼女の命を救えなかった理由）

ICRCがHealth Care in Danger ~危機に立つ医療活動~ のグローバルキャンペーンの一環で制作したショートフィルム。世界最大規模の広告の祭典、カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバルのフィルムクラフト部門でグランプリを受賞。

◆ ICRCスタッフによるレビュー ◆

作品の視聴後、喪失されつつある命がもたらす圧倒的な絶望感と、現在のメディアで触れることができなくなった痛切な痛みが残りました。そして映画は将来への伏線無く終わります。 多くの視聴者に対して、この映画は医療機関への攻撃という不条理な状況へのアンチテーゼとなり、またそれ以上に武力紛争がもたらす悲劇を訴えています。 HOPEという

視聴はこちら



ゴールド（GOLD）

アマルは戦中のシリアに姉妹と住んでいる。水と食料が不足している中、散歩道で金の欠片を見つける。するとまわりが自分のものだと名乗りだし…。



ヘブロンでの任務

イスラエルでは18歳になると軍隊への入隊が可能となり、入隊後２、３カ月で占領地パレスチナの人々を監視する役目を命じられる。元兵士６人が、ヨルダン川西岸地区で最も不安定なヘブロンでの任務を語る。



スタンブルック

1939年、スペインの港アリカンテで積荷の到着を待っているスタンブルック号の船長と乗組員たち。内戦後期のカオスの中、同じ港には共和国政府が手配した船の到着を待ち、国外へ脱出しようとする何千もの人々が身を寄せ合っていた。



管理人

1930年代、独ハンブルク市最大の美術館で、前衛芸術家アニタ・リーの作品がナチスに没収されようとしていた。管理人のヴィルヘルム・ヴェルナーは、作品を守るために自らの命を危険にさらす。実話に基づく物語。



フィルム巻11004番

原爆投下から８ヵ月後の1946年、米軍の撮影班が戦後日本のドキュメンタリーを製作。広島と長崎の様子を写した19分のフィルム巻「11004」は、核兵器史上初めて検閲が行われた事実をもあばいている。



天空の下で

若くして出産を経験したマルタは、ベネズエラから移住するためブラジルに向かっていた。道中、赤ん坊を抱えて困っている若い夫婦に出会う。マルタが母乳を与えたことによって新たに紡がれていく運命の糸。



マドモアゼル ピジョンへの手紙

第一次世界大戦下の1917年。一兵卒のペパンは、想いを寄せるピジョン嬢に戦地から毎日手紙を書くと誓う(ピジョンは日本語で「鳩」の意)。厳しい状況下で彼は何とか必死に約束を果たそうとするが・・・。心が求めているものと、心が必要としているものは必ずしも一致しない、というコメディータッチの切ない物語。



NO LIMITS
南スーダン車いす
バスケットボールチーム

南スーダンで発足されて間もない車いすバスケットボールチームのコーチを務める二人のドキュメンタリー作品。Webby Awards 2020ビデオ部門で、最優秀スポーツ作品賞を受賞。

視聴はこちら



今年はICRC駐日代表部のFacebookとTwitterアカウント上で、駐日代表部のスタッフによる各作品のレビューも投稿する予定です。バックグラウンドが多様なICRCスタッフは作品を視聴して、どのように感じたのか？ぜひ、SNSをフォローしてスタッフによるレビューもご覧ください。鑑賞された後の皆さんのご意見、ご感想もSNSで受け付けています。お気軽に投稿してください！

ICRC駐日代表部 Twitter　　ICRC駐日代表部 Facebook

その他のニュースはこちら

© 2021 INTERNATIONAL COMMITTEE OF THE RED CROSS

配信停止をご希望の方は、お手数ですがこちらよりお手続きください。
ICRC駐日代表部のプライバシーポリシーはこちらでご確認できます。

INTUIT mailchimp